

須磨海浜水族園における飼育バンドウイルカ 6 頭の行動特性

尾崎 日向子

【序論と目的】

かつては、文化をもつのは人類だけであり、動物には文化がないと考えられていた。しかし、霊長類を中心に文化的行動が複数確認されて、今ではヒト以外の動物でも文化をもつということが知られている。平田 (2001) によれば、社会的学習能力などの高い認知機能と持続的な社会集団があれば、行動が伝達し文化となる可能性がある。霊長類以外の動物でこれらの条件を満たす動物の一つがバンドウイルカ (*Tursiops truncatus*) である。文化と呼べるような行動に限らず、集団には様々な行動の特徴がある。神戸市立須磨海浜水族園のイルカ集団の特徴として、2005 年に観察を行った Yamamoto et al. (2014) では、逆立ちをしながら頭や口を動かして水流を作ることで餌を動かすという行動が報告された。本研究では、須磨海浜水族園において飼育されている 6 頭のバンドウイルカの行動観察を行い、各個体の行動特性について明らかにすることを目指した。6 頭の個性と個体間関係、1 日の時間帯による行動の変化、利用可能なプールの組み合わせによる行動の変化、逆立ち行動についての 4 点を検討した。

【方法】

本研究では、神戸市立須磨海浜水族園において飼育されているバンドウイルカ 6 頭の行動観察を行った。クー、マミー、ラヴ、ジーナ、ケイトの 5 頭が成体のメスであり、ロクマルが 3 歳で未成体のオスである。6 頭のうちランダムに選んだ 1 頭を、朝 8:30 頃から夕方 16:30 頃まで個体追跡した。個体追跡の 1 セッションは 30 分である。全生起法を用いて個体間の行動として並泳、ラビング、遊び、威嚇、けんかを相手個体も含めて記録した。個体行動として逆立ちを記録した。本観察は、2019 年 10 月 9 日から 2019 年 12 月 3 日までの期間に 25 日間実施し、個体追跡による観察時間は合計 115.5 時間となった。

【結果と考察】

6 頭の行動は個体ごとに特徴が見られた。未成体個体に限らず成体個体でも遊びが見られたが、観察時間に占める遊びの生起時間の割合はより若い 3 頭のイルカ(ジーナ、ケイト、ロクマル)で多かった。並泳、ラビング、遊びの親和的な行動を全個体と活発に行っていたのは最も若い 2 頭(ケイト、ロクマル)であった。6 頭のバンドウイルカは特別な理由がない限り、毎日 4 回イルカライブとトレーニングライブに出演していた。ライブでは音楽に合わせたパフォーマンスと給餌が行われる。ライブとライブの間は約 1 時間あるが、ライブ終了直後の 30 分は逆立ちが多く、並泳や遊びは少なかった。一方、その後の 30 分は逆立ちが少なく、並泳や遊びが多くなった。したがって 6 頭の行動はライブに影響を受けていたと考えられる。利用可能なプールの組み合わせによる行動の変化は、本研究では明らかにすることはできなかった。逆立ち行動は泳いでいる最中に逆立ちを始め、餌いじりをして逆立ちを終了し、また泳いでいく一連の行動である。須磨海浜水族園では、2005 年に 4 頭のうちの 3 頭がこの逆立ち行動をするのが確認されていた (Yamamoto et al., 2014)。これら 3 頭のイルカのうち 2 頭が本研究の観察時も須磨海浜水族園で飼育されていたクーとマミーである。観察した 6 頭のうち、クーとマミー以外の 4 頭は 2005 年以降に来園したか、もしくは同水族園で生まれた個体である。2019 年の観察時には、集団の 6 頭全頭が 2005 年時点と同じ方法で逆立ちと餌いじりをしていた。クーとマミーの行動が、2005 年以降に来園した 3 頭と、2016 年に生まれたマミーの子どものロクマルにも伝播したと考えられる。一つの行動が持続的な集団の中で世代を超えて全個体に伝播し、その集団の文化になっていったといえる。(比較行動学)